

博物館だより



No.187

令和4年6月1日

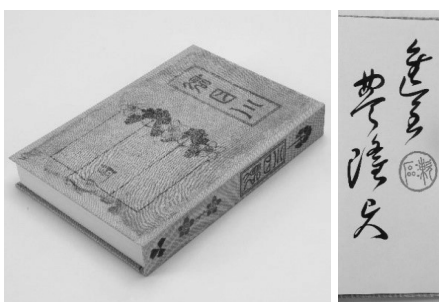
みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

日	月	火	水	木	金	土
29	30	31	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	1	2

休館日 ※情報はR4.5.21現在

◆博物館NEWS

町の「お宝」がよみがえりました！
小宮豊隆資料「漱石進呈本『三四郎』」の修理が完了しました！
博物館の注目資料でもある小宮豊隆資料のうち、その歴史的価値にもかかわらず、虫食い被害でお披露目が叶わなかった「漱石進呈本『三四郎』」の修理が完了し、先ごろ修理業者から当館へ引き渡



▲修復なった漱石進呈本『三四郎』表紙(見返し)の裏に記された漱石の惠存署名「進呈 豊隆君」の文字等は写真から復元しました

◆講座・教室・催し物ガイド

6月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】
6月4日(土) 9時30分～
- 【古文書講座】
6月11日(土) 10時～
- 【古典かな講座】
6月18日(土) 9時30分～
- 【みやこ学講座】
6月25日(土) 10時～

※新型コロナウイルス感染防止対応に伴い、日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途ご案内します。



▲修復中の本 辛うじて残る表紙の布をはがして洗浄・再貼付しました

文化遺産ボランティア養成講座(第7期)参加者募集!

◆講座・教室・催し物ガイド
◆6月の歴史講座
◆漢詩紀行講座
◆古文書講座
◆古典かな講座
◆みやこ学講座

◆本は新聞小説『三四郎』が単行本化された際、著者の漱石が主人公のモデルとされた小宮宛贈ったもので、漱石が惠存署名しています。贈られた小宮も存命時は本書を宝物のようにしていたといいますが、残念ながら虫食い被害に遭い、開くこともままならない状態でした。

◆今回、文化財の修復技術も活用した洗浄や欠損部の取替を行い、展示も可能な復元が整いました。最終確認後、常設展示の予定です。◆ご来館の際はお見逃しなく!

◆今期講座は「実稼働続特別編」。コロナ禍での活動メニューは、屋外活動を中心に、少人数で安全に楽しめるもの。具体的にどんなものがあるのか?知恵と工夫を出し合いながら共に答えを探しましょう。「町のお宝の魅力」を発信する取組が誰かの癒しとなります。◆一緒にいかがですか!
◆6月5日(日)以降月1回程度。
◆申込時に詳細を案内します。
◆申込先 33-4666へ

3・4月の業務日誌から

3月25日(金)、2年に亘る保存修理を終えた仏画「賢劫千仏図(国分寺蔵)」が博物館へ搬入されました。この仏画は同寺が九州国立博物館の工房で修理したのですが、貴重な仏画を地域にもお披露目したいと当館へ寄託して下さいました。

4月30日(土)、育徳館高校内「思永館」で、郡長正公記念交流事業が行われました。この事業は長正の死から150年を超えたことを機に、長正の故郷・会津若松市(福島県)との交流も深めようと企画されたものです。

3月、令和3年度の豊津小学校6年生が豊津・勝山地域の史跡学習の後、皆で協力して作成した史跡巡りパンフレットを博物館にいただきました。カラフルなパンフレットで子供から大人まで親しまれる内容となっています。

4月29日(金)、「みやこの刀剣美展」に伴う「ギャラリートーク」を実施しました。県外から足を運んでいただいた方もみられるなど午前、午後ともに大盛況で、トーク終了後も刀剣談義に花が咲きました。



▲点検を受ける千仏図 修理は国宝修理装演師連盟加盟工房の(株)宰匠が行い 住友文化財団の補助を受け実施されました



▲地元ならではの情報も満載 とても分かりやすいパンフレットになりました



▲会場では元育徳館高校長の小正路淑泰先生による「郡長正が結ぶ会津と豊津の誇りの交流」と題した記念講演等が行われました



▲連休初日とあって大盛況!多くの「刀剣女子」も訪れました

みやこの歴史発見伝 148
 みやこの猫ものがたり ⑥
 「猫」の足跡から探るみやこの歴史
 — その6 —

軍事侵攻下のペット

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が長期化しています。度重なる攻防により、安全な場所を失った多数のウクライナの人々は住み慣れた故郷を離れ、言葉の通じない国外へ避難しています。この時、主人と離れてしまいう途方に暮れる多くのペットの姿も報道されました。核家族化が進む現在、人々にとつてペットはかけがえのない重要なパートナーに位置付けられています。今回は、失踪した飼い猫の捜索に奔走し、その実体験



小宮豊隆宛贈呈図書展示(みやこ町歴史民俗博物館)

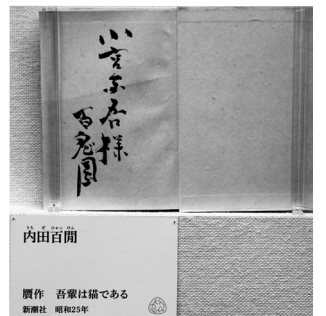
に基づいた執筆作品が「ペトト喪失体験文学の傑作」と評された一人の漱石門下生についてご紹介します。

「吾輩は猫である」を読んで
 「夏目漱石の文学スタイル、ユーモアの継承者」として評価されている岡山県出身の随筆家、内田百閒(1889

(1971)は、16歳の時に夏目漱石の「吾輩は猫である」を読み、これまでの文学作品にはない斬新な内容に深く感動し、文学に興味を持ちます。その後、第六高等学校(現在の岡山大学の前身校)へ進学した際「老猫」という作品を発表します。これ

を読んだ友人の「尊敬する夏目先生に読んでもらったら？」という薦めを受け、漱石にこの作品を送ります。漱石は多忙の中、アドバイスを含めた「書評」を返送し、これを受け取った百閒は心から感動。以後、「熱狂的な漱石ファン」になってゆきます。

東京帝国大学(現東京大学)入学後の明治44年(1911)、療養中の夏目漱石を見舞い、念願の門下生となります。このとき、みやこ町出身の小宮豊隆をはじめ鈴木三重吉(広島県出身の童話作家)、森田草平(岐阜県出身の小説家)、野上豊一郎(大分県出身の英文学者)らと知り合います。博物館には、これらの漱石門下生が自らの著書に署



内田百閒が著書にサインして小宮豊隆に謹呈した図書(みやこ町歴史民俗博物館蔵)

名をして小宮豊隆に贈った「謹呈図書」を展示しています。この中には内田百閒の他、芥川龍之介等の作品も見られます。百閒はその後、漱石の著作本の校正にも携わり、政法大学等で独語教師を18年間務めています。

愛猫「ノラ」

昭和30年(1955)百閒は自宅の庭にある金魚の水甕に飛び込んでしまった野良の牡猫を助けます。それ以降、この猫を野良猫に因んで「ノラ」と名付けて可愛がりました。この猫との出会いは、師である漱石の「吾輩は猫である」のラストシーンそのものですが、百閒はこの水甕で溺れ死んだ猫を再びよみがえらせて「贖作吾輩は猫である」を執筆します。鱈の切り身や鰯屋の卵焼きを与えるなどノラを「溺愛」した百閒でしたが、突然悲劇的な別れが訪れます。

「ノラ」失踪と捜索

昭和32年(1957)3月27日水曜日、突然、ノラが失踪します。愛する飼い猫の失踪に百

閒は大きなショックを受け、「一日中涙止まらず」「失踪以来、風呂に入らず顔も洗わない」「顔を伏せてノラやノラやと呼んで泣き入った」と憔悴しきった自らの姿を作品に記しています。

ノラ失踪の2週間後、百閒はノラ捜索のため、大金を費やしながら新聞に迷いネコの広告を掲載します。その後、2週間隔で5種類のチラシを3000〜5000枚印刷し新聞の折り込み広告にします。チラシには、「薄い赤の虎ブチで背・腹部は白毛」な

どノラの特徴と電話番号が記されています。近隣には外国人が多く暮らしていたため英文ポスター1500枚を作成する念入れようで、近所の文具店では小学生に情報提供を求めため、ひらがなのピラも作成・配布しています。ノラ失踪後、泣きはらす百閒を見て友人が熊本の八代への旅に誘い出しますが、ノラを思い出して泣き出す始末。このような努力も空しく、ついにノラは帰ってきませんでした。

「ノラ」と「クルツ」

悲しみに暮れた百閒は、寂しさに耐えられず、ついに家にすみついた他の猫を飼うことにし



ノラの特徴「白毛に赤の虎ブチ」(イメージ)

ます。尻尾が短かったので「クルツ」(ドイツ語で短い意味)と名付けられたこの猫を見て「横顔などはノラを見ているような気がする。だから私は困る」と述べるなどノラの代わりにクルツを飼うことへの罪悪感をうかがわせる文面もみられます。その後、このクルツも病死してしまい、その悲しみを綴った『ノラや』、『クルやお前か』は猫を対象とした「ペットの喪失体験文学の傑作」と評されています。

「猫の地位向上」の先駆者

猫を小説の主人公にした夏目漱石、研究対象とした寺田寅彦、そして師や門下の先輩とは異なり、家族やそれ以上に愛情を注いだ百閒の作品は、現在みられる人間とペットという相互の間に位置付けることができます。

70歳を超えた男性が失踪した一匹の猫に対して、自費で総計2万枚に及ぶチラシを配り14年にわたって捜索する姿は、約60年前の人々には理解し難いものであったのかもしれませんが。その理由を聞くと「猫がひとりぼっちでいるなんて可哀想じゃないか!」と答えたと伝えられますが、彼の文学人生には常に「猫との縁」を垣間見ることができ、それこそが本当の理由であったのかもしれない。

(井上信隆)